

富津市小・中学校再配置構想

— 「富津市小中学校統廃合等に関する提言書」に基づいて —

これからの市内小・中学校のあり方を
市民の皆様と共に検討してまいります。





市章



市の木・さくら



市の花・つつじ

市章はフツツの文字の図案化で、フは  、ツは  で表し
全体を和と飛躍をもって表現したものです。

平成 2 1 年 2 月 2 6 日
富津市教育委員会

はじめに

小・中学校再配置方針

1 富津市学校教育基本方針		
(1) 教育施策と指針	・・・・・・・・・・	2
(2) 学校施設整備方針	・・・・・・・・・・	3
2 児童・生徒数の現状と見通し		
(1) 現状	・・・・・・・・・・	4
(2) 見通し	・・・・・・・・・・	6
(3) 学校規模適正化の必要性	・・・・・・・・・・	10

小・中学校再配置計画案

(1) 統合による適正規模の確保	・・・・・・・・・・	12
(2) 統合検討計画	・・・・・・・・・・	14

おわりに

本書の統計数値は以下のように表記しています。

幼児・児童・生徒数は各年度とも5月1日の数値であり、学級数は特別支援学級を含みません。また、学級編制の弾力的運用等による学級増を含まない標準学級数（公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律による）です。

なお、平成21年度以降については平成20年度における推定値を使用しています。

はじめに . . .

本市の基本構想は、人・地域・自然・産業の「連携」による「自立」したまちづくりを推進することで、「躍動とにぎわい 安らぎとふれあいの交差するまち ふつつ」の実現をめざしています。そのためには、社会の変化に対応した学校施設・設備の整備とともに、子どもたちが互いに学び合い、磨き合うことのできる教育環境づくりが必要不可欠です。

しかしながら、近年の少子化と人口減少は、本市においても学校の小規模化を進行させており、このままの状態が続けば市内の学校の様子が大きく変貌することは明らかです。私たちは、将来にわたって子どもたちの成長に寄与できる教育環境を維持・発展させるために、今、現状をしっかりと認識することが必要です。そして市民の皆様と共にこの問題について考えなければなりません。

そこで、本市では平成16年度に「富津市小中学校統廃合検討委員会」、18年度に「富津市小中学校統廃合等検討庁内会議」を設置し、検討を始めました。さらに19年度からは広く市民のご意見を求めるため、市議会議員、区長、保護者、小・中学校長、公募者による「富津市小中学校統廃合等検討懇談会（以下「懇談会」という。）を設置し、学校の適正規模・適正配置等の検討を委ねました。

懇談会は計9回の会議を経て、「富津市小中学校統廃合等に関する提言書」をまとめ、教育委員会は平成20年8月にその報告を受けました。この提言書には、学校の統廃合は「子どもたちに、より充実した教育環境を提供するという基本姿勢で検討しなければならない」とする基本的な考え方を踏まえた上で、適正規模・適正配置を含めた学校教育全体についての計画の策定と公表を市に求めています。

教育委員会では、この提言書の趣旨を十分に尊重し、また、21年1月5日から31日までの『富津市小・中学校再配置構想（案）』のパブリックコメント期間に市民の皆様から直接いただいた多くのご意見を参考にしながら、教育環境の一層の充実を図るために『富津市小・中学校再配置構想』を策定しました。これは、学校の統廃合を前提としたものではありません。市内小・中学校のあり方について、今後も市民の皆様とともに検討していきます。

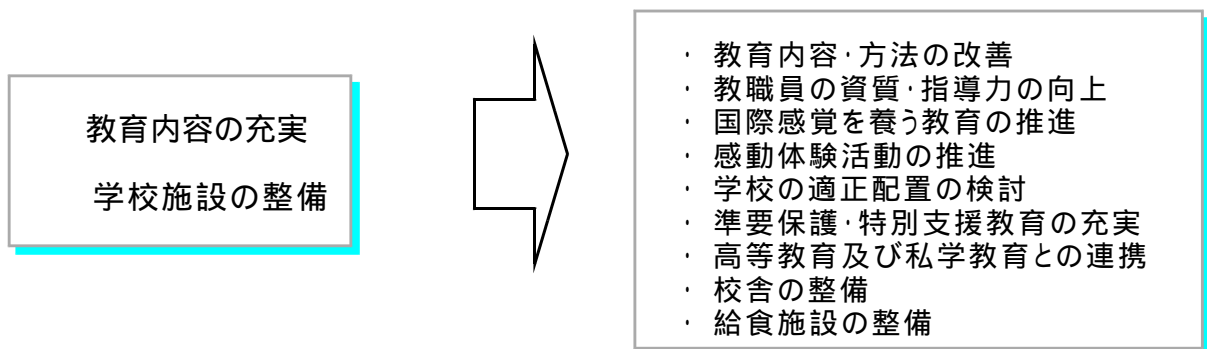
小・中学校再配置方針

1 富津市学校教育基本方針

(1) 教育施策と指針

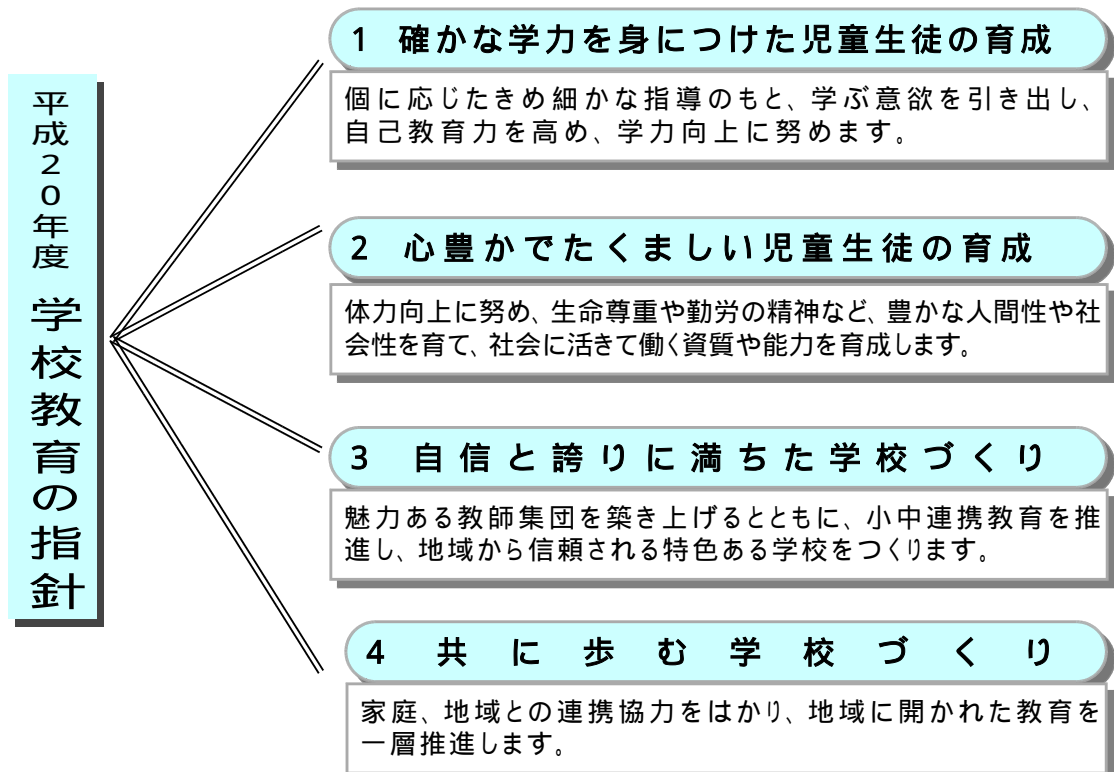
科学技術の進歩、国際化・情報化社会の進展、さらには核家族化、少子・高齢化など、児童・生徒を取り巻く環境は急激な変化を遂げています。このような中、生涯学習の基礎づくりの役割を担う学校教育には、人間性豊かで社会の変化に対応できる人間づくりが求められています。

このために、教職員の資質及び指導力の向上を図り、家庭・地域社会との連携を深める必要があること、そして児童・生徒一人ひとりの個性に応じた教育を推進することなど、学校教育のさらなる充実を図ることが重要です。 そのために、以下の施策を推進します。



第2次基本計画(いきいき富津5か年プラン H18.3)

そして、学校教育の指針を以下のように定めます。



(2) 学校施設整備方針

安全で安心な学校施設

児童・生徒が安心して学習に励めるように、優先度の高い校舎から耐震補強工事を進めます。

平成18年度実施の耐震化優先度調査により耐震化計画をたて、この計画に基づき工事を進めており、20年度の状況は以下のとおりです。21年度以降も耐震診断・設計・補強を順次行なっていきます。

工事内容	施設	学校名 (H20年度)
1 耐震診断	校舎	青堀小学校普通教室棟、富津小学校、飯野小学校、天羽東中学校
	体育館	天羽中学校
2 耐震設計	校舎	青堀小学校特別教室棟、佐貫小学校、天羽中学校

また、学校の安全をより一層確かなものとするため、施設・設備の維持、補修等にも努力するとともに、食の安全を確保し食育推進につながる給食施設の整備にも努めます。

社会の期待に応える学校施設

高度情報化社会が加速度的に進展していく中、コンピュータやインターネットを正しく活用するなど、社会の変化に主体的に対応できる「情報活用能力」を育成することは非常に重要です。

このため、学校図書館の充実や校内LAN等の一層の整備に努力してまいります。

また、学校と家庭・地域との連携の絆をより確かなものとし、地域から信頼され、地域と共に歩む学校づくりをめざし、グラウンド、体育館、特別教室等を市民が利用しやすいよう、その整備に向け努力していきます。

2 児童・生徒数の現状と見通し

(1) 現状

富津市内には小学校12校、中学校5校が設置されていますが、そのうち12学級に満たない小規模校が14校を占めています。

小学校

富津地区に3校、大佐和地区に3校、天羽地区に6校あり、児童は、原則、徒歩で通学しています。遠距離通学等のためにスクールバス、路線バス、自転車を利用して、いる児童もいます。概して天羽地区は遠距離通学の児童が多くなっています。

児童数は、昭和56年度の5,664人をピークに徐々に減少し、平成20年度には2,385人となり、大きく減少しています。

児童数が400人を超える学校は青堀小学校(616人)のみであり、100人未満の小規模な学校が4校あります。学級数では、6学級未満(複式)が2校あり、標準規模の12学級～18学級の学校は青堀小学校と大貫小学校だけです。

中学校

富津地区に1校、大佐和地区に2校、天羽地区に2校あり、生徒は、原則、徒歩と自転車で通学しています。遠距離通学の生徒はスクールバス、路線バスや電車を利用しています。概して天羽地区は遠距離通学の生徒が多くなっています。中学校の学区は小学校単位であり、同じ小学校を卒業した児童が異なる中学校に進学することは、通常ありません。

昭和30年代から40年代はじめまでは、生徒数は3,000人をこえていましたが、徐々に減少し、平成20年度は1,319人と大きく減少しています。

生徒数が300人を超える学校は富津中学校(616人)のみであり、100人未満の小規模な学校が2校あります。学級数では、全校で3学級(全学年が1学級)が2校、標準規模の12学級～18学級の学校は富津中学校だけです。

児童・生徒数及び学級数

平成20年5月1日現在

地 区	小 学 校	中 学 校
富津地区	青堀小学校 616 (18)	富津中学校 616 (17)
	富津小学校 285 (11)	
	飯野小学校 254 (11)	
大佐和地区	大貫小学校 316 (12)	大貫中学校 297 (8)
	吉野小学校 225 (7)	
	佐貫小学校 144 (6)	佐貫中学校 95 (3)
天羽地区	湊小学校 209 (7)	天羽中学校 227 (6)
	天神山小学校 72 (6)	
	竹岡小学校 81 (6)	
	金谷小学校 47 (5)	
	環小学校 103 (6)	天羽東中学校 84 (3)
関豊小学校 33 (3)		

※ () 内の数値は学級数

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律

小・中学校の学級編制の基準

◇同じ学年の児童・生徒で編制する学級は40人を標準とする。

- ・例 ○学年が ~ 40人の時は1学級とする。
- 学年が 41~ 80人の時は2学級とする。
- 以後、 81~120人まで3学級、121~160人まで4学級のように、40人毎に学級数が変動する。

◇異なる学年の児童・生徒で編制する学級（複式学級）は16人を標準とする。

（第1学年と第2学年の場合は8人とする。）

- ・例 ○第2学年（8人）と第3学年（8人）は、複式学級（16人）となる。
- 第2学年（9人）と第3学年（8人）は、第2学年1学級、第3学年1学級となる。

(2) 見通し

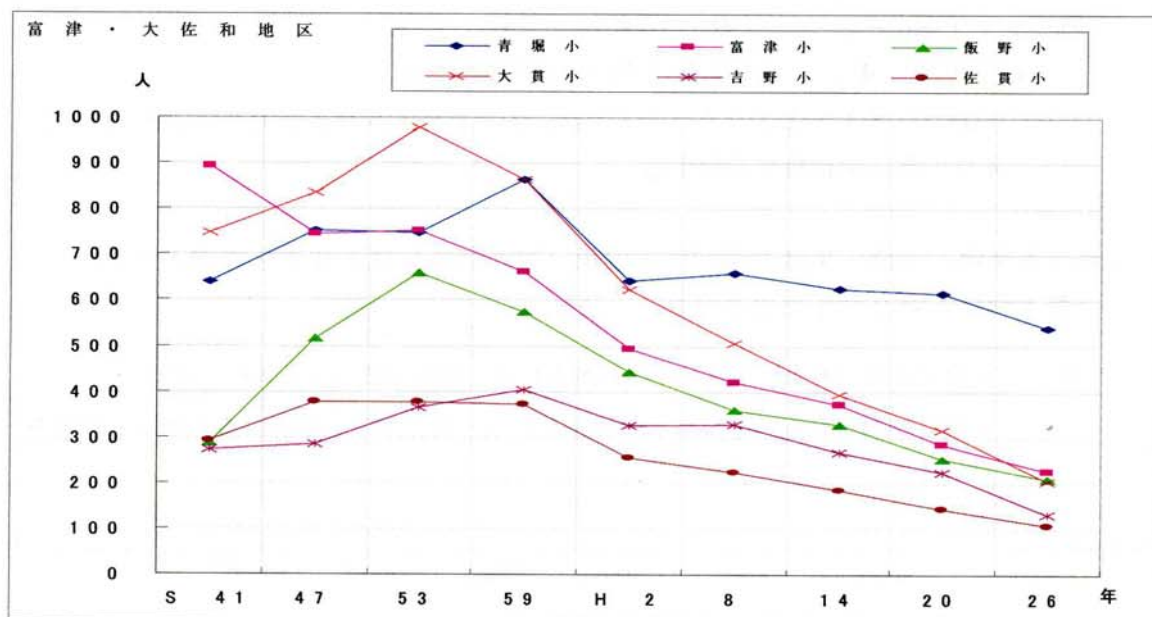
① 小学校

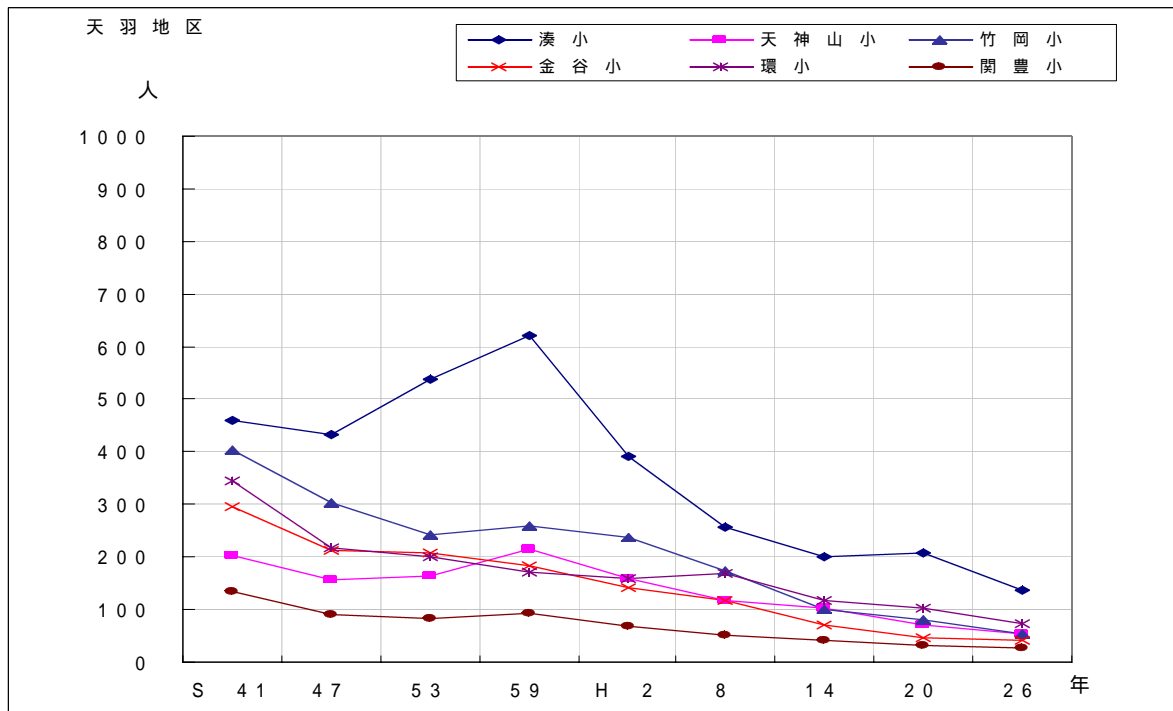
市内の各小学校の児童数は、昭和40、50年代をピークとし、減少の一途をたどっています。北部に比べて南部に位置する学校は児童数の減少が特に著しい状態です。

平成26年度の推定値からは、ピーク時の7分の1程度の児童数になると予想される学校もあり、全校児童数が100人に達しない5校が天羽地区に集中しようであることを示しています。児童数が10人に満たない学級も多くなり、グループ学習や係り活動、集会活動などの集団の中で多様な価値観に触れ、切磋琢磨したり、意見調整をしながら社会性の基礎を培う等の面では、不安を感じることもあります。

児童数の推移

	青堀小	富津小	飯野小	大貫小	吉野小	佐貫小	湊小	天神山小	竹岡小	金谷小	環小	関豊小
S 41	640	892	286	748	273	291	459	204	404	296	345	135
47	751	745	517	835	285	377	432	156	302	213	218	90
53	748	753	659	977	366	376	539	165	243	209	200	82
59	864	663	574	864	405	373	620	215	260	184	170	92
H 2	642	494	443	623	327	255	392	160	237	142	158	68
8	660	422	361	506	329	225	256	117	173	117	169	52
14	625	373	329	394	267	186	201	103	101	71	117	41
20	616	285	254	316	225	144	209	72	81	47	103	33
26	541	227	210	205	132	107	136	53	55	41	73	28

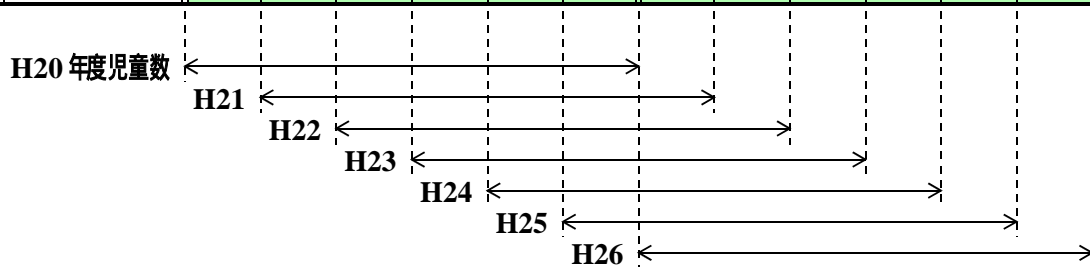




小学校学年別児童数

1学年20人未満

		小6	小5	小4	小3	小2	小1	5歳	4歳	3歳	2歳	1歳	0歳
富津	1 青堀小	118	106	90	111	107	84	92	81	102	90	97	79
	2 富津小	51	47	60	42	48	37	44	44	36	34	37	32
	3 飯野小	46	43	41	43	40	41	38	46	45	23	27	31
大佐和	4 大貫小	58	60	52	58	43	45	47	37	35	30	26	30
	5 吉野小	38	39	49	38	29	32	16	26	26	16	23	25
	6 佐貫小	28	29	25	21	26	15	25	22	12	23	13	12
天羽	7 湊小	37	44	35	29	34	30	34	23	32	17	17	13
	8 天神山小	16	8	15	14	9	10	12	9	7	9	9	7
	9 竹岡小	12	16	16	14	13	10	9	13	4	14	6	9
	10 金谷小	5	10	9	10	8	5	7	7	3	9	5	10
	11 環小	23	23	12	19	14	12	17	12	12	10	13	9
	12 関豊小	6	8	7	5	2	5	3	6	2	6	5	6



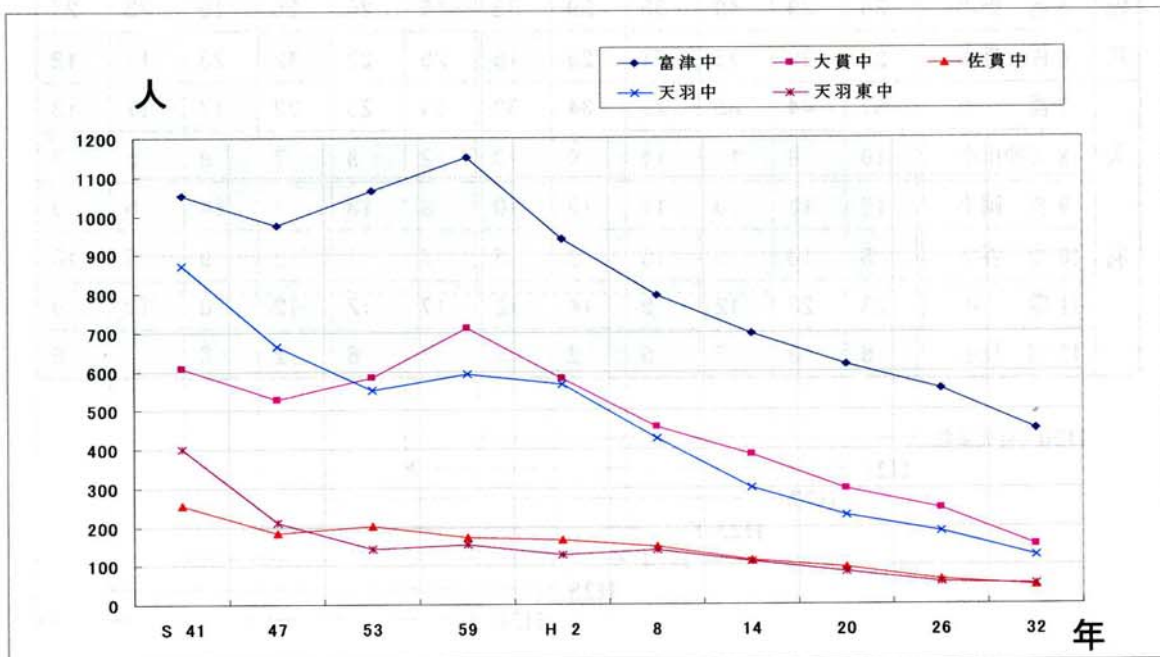
② 中学校

市内の各中学校の生徒数は、昭和40、50年代をピークとし、減少の一途をたどっています。

平成32年度の生徒数の推定値は、ピーク時の7分の1程度になる学校があることを示しています。全校生徒数が50人に達せず、1学級の生徒数が20人にも満たない小規模校は2校となります。多様な価値観に触れる学習集団の機能や、体育祭や文化祭、あるいは部活動等の課外活動も含めた集団活動の果たす役割も大きい中学校の教育機能が十分発揮できるか不安になるところもあります。

生徒数の推移

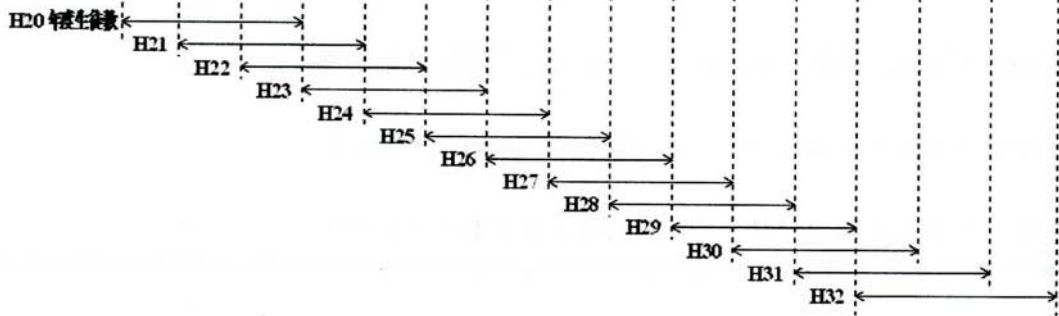
年度	富津中	大貫中	佐貫中	天羽中	天羽東中
S 41	1052	606	254	872	401
47	974	528	185	663	211
53	1063	585	202	551	142
59	1151	710	173	593	153
H 2	940	580	167	567	127
8	795	455	147	428	139
14	695	386	114	298	109
20	616	297	95	227	84
26	553	245	62	186	57
32	450	150	48	125	49



中学校学年別生徒数

1学年以降

		中3	中2	中1	小6	小5	小4	小3	小2	小1	5歳	4歳	3歳	2歳	1歳	0歳
富津	1 富津中	213	218	185	215	196	191	196	195	162	174	171	183	147	161	142
大佐和	2 大貫中	105	113	79	96	99	101	96	72	77	63	63	61	46	49	55
	3 佐貫中	27	39	29	28	29	25	21	26	15	25	22	12	23	13	12
天羽	4 天羽中	75	77	75	70	78	75	67	64	55	62	52	46	49	37	39
	5 天羽東中	27	31	26	29	31	19	24	16	17	20	18	14	16	18	15



部活動の状況 (20年度)

	富津中	大貫中	佐貫中	天羽中	天羽東中
剣道	男・女	男・女	男・女	男・女	男・女
サッカー	男	男		男	
柔道	男・女				
ソフトボール	女				
卓球	男・女	男	男・女	男	
テニス	男・女	男・女	女	女	男・女
バスケットボール	男・女	女		男・女	
バドミントン	男・女	男・女		女	
バレーボール	男・女	男・女	女	女	女
野球	男	男	男	男	男
吹奏楽	○	○		○	
合唱	○				
美術	○	○			
家庭科	○				
合計	14	10	5	9	4

※ 運動部は男女別に、文化部は設置の有無を表示しました。

なお、今後の各部活動の存廃について検討中の学校もあります。

(3) 学校規模適正化の必要性

規模の比較的小さな学校では、一人ひとりの子どもに教師の目が行きとどき、個に応じたきめ細かな指導が可能です。また、その家庭的な雰囲気により、友達との人間関係も良好で、集団の中での自己有用感・存在感等を感じ、学習や諸活動に意欲的に取り組んでいる児童・生徒が多くいます。以下にそのメリットと思われる点をあげてみます。

- ・教職員が、児童・生徒と直接触れ合える機会が多く、家庭的な雰囲気の中で指導にあたる。
- ・学校行事は、一人ひとりの存在感・達成感のある密度の高い取り組みが期待できる。
- ・個別指導の時間が確保でき、個人差に応じた学習指導が期待できる。
- ・読み聞かせや読書指導などは、全校規模で継続的に実施しやすい。
- ・学校外での観察や体験など、多様な指導方法を取り入れやすい。 など

しかし、小規模校では多様な人間関係の中で切磋琢磨しながら、困難に立ち向かう強い意志を培う機会が少なくなる傾向にあります。特に複式学級では、交互の指導になるため学習意欲を削ぐことも懸念されます。また、中学校では、同じ目標に向かって励まし合い、競い合い、友と一緒に汗を流す部活動が成立しがたい面もあります。以下にそのデメリットと思われる点をあげてみます。

- ・家庭的な雰囲気が時には、切磋琢磨する機会を少なくさせることもあり、逞しさが育ち難い面もある。
- ・安定した人間関係により多様な意見が出にくいこともあり、コミュニケーション能力を伸ばしがたい面もある。
- ・委員会活動や運動会・体育祭行事など、児童・生徒の役割分担が広範囲におよび、過度の負担となりやすい面もある。
- ・少人数のため多様な考え方を引き出し、生かす授業が成立しにくい面もある。
- ・合唱・合奏、団体競技などでは、1つの目標に向かい互いに励み・励まされるなかで、集団としてのダイナミズムを肌で感じ、連帯感、所属感、達成感に満たされ、精神的に成長していく機会が十分に得られない面もある。 など

現在、市内の小規模校ではデメリットを補う工夫をしながら、メリットを生かしたきめ細かな教育を積極的に推進しています。

しかし、学校教育が「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」をめざし、子ども達に知・徳・体の調和のとれた成長を促すためには、多様な人間関係の中で切磋琢磨する機会を保障する、一定規模以上の集団の中で教育を推進していくことが必要であるとも考えます。

今後、学校の小規模化がさらに進むことを考えるとき、学校規模の適正化を図り、適正配置を推進していくことが、ふるさとの将来を担う子ども達の教育にとっては、極めて重要な課題であり、慎重かつ大胆に検討する必要があります。

富津市小中学校統廃合等検討懇談会の提言を真摯に受けとめ、単なる数合わせでなく、地域と学校との関わり、統合による教育効果等を冷静に見極めることが肝要であると考えます。

小学校適正規模

提言書より

学級数
・ 各学年1学級以上 全校で6学級以上

児童数
・ 1学級20人以上

通学距離
・ 8キロメートル程度

小規模校の利点として確かに個々に応じたきめ細かな指導が展開できることはある。しかし、複式学級では学級担任が二つの学年の児童に同時に授業を展開することとなる。「学年1学級以上」とは複式学級が避けられるという条件であり、「1学級20人以上」とは児童の切磋琢磨の機会や音楽や体育などの活動の充実には、ある一定数以上の児童数が望まれるということである。

中学校適正規模

提言書より

学級数
・ 各学年2学級以上 全校で6学級以上

生徒数
・ 1学級30人以上（学年60人以上）

通学距離
・ 15キロメートル程度

小規模校でもその家庭的な雰囲気により、友達との良好な人間関係を形成し、集団の中での自己有用感・存在感等を感じ、学習や部活動に意欲的に取り組む生徒も多い。しかし、友達との切磋琢磨により困難に立ち向かう強い意志を培う場面はやや少なくなることも考えられる。「学年2学級以上」とはクラス替えが可能となることであり、「1学級30人以上」とは多感な青春時代を生きる中学生にとり、より多様な人間関係の中で互いに心と身体を磨き育まれることが必要と考えるということである。

II 小・中学校再配置計画案

(1) 統合による適正規模の確保

2ページからの検討を踏まえながら、具体的に学校統合を考察してみます。

(適正規模の確保のためには、学区の再編も一方策ですが、学区の再編は地域の一体感を著しく損ねる可能性もあることなどから、ここではとり上げません。)

① 小学校

現状では、青堀・富津・飯野・大貫・吉野・湊小学校の6校は全学級が20人以上ですが、天神山・竹岡・金谷・関豊小学校の4校は全学級が20人に達しない状況です。

また、佐貫小学校の1学級と環小学校の4学級が20人に満たず、金谷・関豊小学校は複式学級となる学年もあります。

平成26年度には、青堀・富津・飯野・大貫小学校の4校は全学級が20人以上を維持するものの、天神山・竹岡・金谷・環・関豊小学校の4校は全学級が20人に満たない状況となり、吉野小学校の2学級と、佐貫・湊小学校の3学級が20人に満たなくなる見込みです。また、天神山・金谷・関豊小学校の2校が複式学級を有する学校となりそうです。

従って、学校の適正規模化を図るためには、天神山・金谷・関豊小学校とともに、竹岡・環及び湊小学校についても検討する必要があります。このことは、長期的視野に立てば、天羽地区西部の4小学校を1つの小学校に統合することの必要性を示唆しています。しかし、地理的位置や学校規模の違い等から、一斉の統合ではなく、保護者・市民との調整が整った学校から進めるのも一つの方法であると考えます。

また、吉野・佐貫小学校についても、長期的視野をもって検討していくことが必要と思われます。

児童数・学級数

		平成20年度								平成26年度							
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	総数	学級	1年	2年	3年	4年	5年	6年	総数	学級
富津	1 青堀小	84	107	111	90	106	118	616	18	79	97	90	102	81	92	541	17
	2 富津小	37	48	42	60	47	51	285	11	32	37	34	36	44	44	227	8
	3 飯野小	41	40	43	41	43	46	254	11	31	27	23	45	46	38	210	8
大佐和	4 大貫小	45	43	58	52	60	58	316	12	30	26	30	35	37	47	205	7
	5 吉野小	32	29	38	49	39	38	225	7	25	23	16	26	26	16	132	6
	6 佐貫小	15	26	21	25	29	28	144	6	12	13	23	12	22	25	107	6
天羽	7 湊小	30	34	29	35	44	37	209	7	13	17	17	32	23	34	136	6
	8 天神山小	10	9	14	15	8	16	72	6	7	9	9	7	9	12	53	5
	9 竹岡小	10	13	14	16	16	12	81	6	9	6	14	4	13	9	55	6
	10 金谷小	5	8	10	9	10	5	47	5	10	5	9	3	7	7	41	4
	11 環小	12	14	19	12	23	23	103	6	9	13	10	12	12	17	73	6
12 関豊小	5	2	5	7	8	6	33	3	6	5	6	2	6	3	28	4	

1学年20人未満

6学級未満

② 中学校

現状では、富津・大貫・天羽中学校の3校は全学年が60人以上・2学級以上ですが、佐貫・天羽東中学校の2校は全学年が1学級であり、当然全学年が60人に達しない状況です。

平成26年度には、富津・大貫中学校の2校は全学年が60人以上を維持するものの、佐貫・天羽東中学校はさらに生徒が減少し、全学級が30人に達しない状況となる見込みです。また、天羽中学校は1学年が60人に達しないものの、2学級は維持できそうです。

平成32年度には、学年60人以上・2学級以上を維持できるのは富津中学校のみであり、大貫中学校は各学年2学級は維持できる見込みですが、全学年が60人には達せず、全校生徒150人程度の比較的規模の小さな学校となりそうです。天羽中学校は全学年が50人未満で4学級、生徒数125人の小規模な学校となり、また、佐貫・天羽東中学校は一段と生徒が減少し、全校生徒が50人に達しない大変規模の小さい学校となる見込みです。

従って、学校の適正規模化を図るためには、佐貫中学校と天羽東中学校について検討する必要があります。その中で、佐貫中学校の統合にあたっては、その地理的位置、通学距離及び交通事情等を考慮すると大貫中学校と天羽中学校が通学可能な学校と考えることができます。

生徒数・学級数

		平成20年度					平成26年度					平成32年度				
		1年	2年	3年	総数	学級	1年	2年	3年	総数	学級	1年	2年	3年	総数	学級
富津	1 富津中	185	218	213	616	17	162	195	196	553	15	142	161	147	450	13
	2 大貫中	79	113	105	297	8	77	72	96	245	7	55	49	46	150	6
大佐和	3 佐貫中	29	39	27	95	3	15	26	21	62	3	12	13	23	48	3
	4 天羽中	75	77	75	227	6	55	64	67	186	6	39	37	49	125	4
天羽	5 天羽東中	26	31	27	84	3	17	16	24	57	3	15	18	16	49	3

1学年60人未満

6学級未満

(2) 統合検討計画

この『再配置構想』は、「子ども達に、より充実した教育環境を提供する」という基本姿勢のもと、保護者・市民と慎重に協議し、調整を図っていくものであり、調整が図れば、実施計画を策定し、具体的な統合準備に移ることとなります。

ここでは、短期で5年、中期で10年、長期はそれ以上の期間として、保護者・地区市民の皆様方と協議・検討するスケジュール案をお示しします。

短期で示されている内容の中で、現に小規模化が進み複式学級のある関豊小学校と環小学校の統合の検討については、重要な課題であると受けとめています。統合の是非はもちろん、通学方法の問題、学校の跡地問題等々、統合に係る諸課題について、保護者・市民の皆様と共に話し合い、検討を重ね、調整が図れば、実施計画を策定していきます。

中期、長期で示されている内容については、今後、予想される児童・生徒数の一層の減少に対し、現段階で近い将来の統合を検討せざるを得ないと考えます。今後、児童・生徒数の現状・見通しについて、市民の皆様と協議する機会を適時持ちたいと考えます。

期間の目安	内 容	備 考
短期 H21 ~	環小学校と関豊小学校の統合の検討 天羽中学校と天羽東中学校の統合の検討	
中期 H25 ~	大貫中学校と佐貫中学校の統合の検討 天羽地区の4小学校の統合の検討 (湊・天神山・竹岡・金谷の4小学校)	佐貫中学校は天羽地区の中学校と統合することも考えられます。
長期 H30 ~	吉野小学校、佐貫小学校の統合の検討	吉野・佐貫小学校がどこで統合すべきかを検討する必要があります。

状況の変化や保護者・市民との協議により、検討時期・対象校が変わることもあります。

○ 14 ページの表のように統合が進んだ場合のモデル

学校名	平成20年度		平成26年度		H26統合モデル		備考
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	
1 青 堀 小	616	18	541	17	—	—	
2 富 津 小	285	11	227	8	—	—	
3 飯 野 小	254	11	210	7	—	—	
4 大 貫 小	316	12	205	7	—	—	
5 吉 野 小	225	7	132	6	—	—	
6 佐 貫 小	144	6	107	6	—	—	
7 湊 小	209	7	136	6	285	10	
8 天神山小	72	6	53	5			
9 竹 岡 小	81	6	55	6			
10 金 谷 小	47	5	41	4	101	6	
11 環 小	103	6	73	6			
12 関 豊 小	33	3	28	4			環・関豊統合

6学級未満

学校名	平成20年度		平成26年		H26統合モデル		平成32年		H32統合モデル		備考
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	
1 富 津 中	616	17	553	15	—	—	450	13	—	—	大貫・佐貫統合
2 大 貫 中	297	8	245	7	307	9	150	6	198	6	
3 佐 貫 中	95	3	62	3			48	3			
4 天 羽 中	227	6	186	6	243	7	125	4	174	6	天羽・天羽東統合
5 天羽東中	84	3	57	3			49	3			

6学級未満

○ 統合を実施する場合に配慮すべき点について

- ・ 徒歩及び自転車での通学が困難な場合、スクールバスや路線バスの利用も検討します。
- ・ 各学校で進められている特色ある教育を引き継げるよう努力します。
- ・ 児童・生徒の心の不安に対し、きめ細かく対応します。
- ・ 児童・生徒やPTAの各種交流事業等を支援し、円滑な移行ができるよう努力します。
- ・ 円滑な統合のため、実質統合の前に形式統合等の採用も検討します。
- ・ 教育委員会が作成し提示した「小・中学校再配置構想」はあくまでも案であり、課題ごとの検討部会等を設けるなど、保護者・市民及び教職員と共に検討し、その結果を尊重しながら、最終的に具体的なスケジュール等も明記した実施計画としてまとめます。

おわりに . . .

富津市小中学校統廃合等検討懇談会から統廃合等に関する提言をいただき、富津市教育委員会は近い将来の小・中学校の再配置についての構想を策定いたしました。

ご承知の通り、富津市の人口は、平成20年5月1日に住民基本台帳上4万9,927人となり、すでに5万人を割っております。少子化の進行と本市の総人口の減少は、当然のごとく小・中学校の児童・生徒の減少につながりました。このことは集団を通して教育を推し進める学校教育にとり重大かつ深刻な問題であります。この現実を直視し、富津市の学校教育の一層の充実を目指してまとめたのがこの構想です。これを「たたき台」として多くの市民の皆様が積極的に議論にご参加くださるよう期待しております。

長引く不況の中にあっても、富津市では企業誘致や子育て支援等のまちづくりを粘り強く続けております。これらの施策の効果など、状況の変化も見定めながら、皆様と共に将来の「ふるさと富津」を担う子ども達が、より充実した教育環境の中で勉学に励める状況をつくってまいりたいと考えております。

「富津市立環南小学校は、明治二十五年駒山尋常小学校として創立、以来この地に奉職した教師の情熱と地域住民の母校への熱い思いに支えられ、輝かしい歴史と伝統を刻んできた。明治、大正、昭和、平成の百十五年にわたる長い歴史の中で、千四百余名の卒業生を輩出するも、時代の流れには抗し難く、平成二十年三月三十一日をもってその学灯を消灯する。この記念碑は公教育発祥の地として永久に語り継ぎ、地域住民一人ひとりの未来への飛躍を願い、誓い合う証として建立する。」

これは、閉校した富津市立環南小学校の校庭にある記念碑『飛躍』の碑文です。惜しまれながらも115年の歴史に終止符をうち、新たな飛躍を誓い合う市民の姿に、学校が地域に生まれ、地域と共に歩んできた永い歴史と伝統の中で果たしてきた役割の重さを感じます。そして学校は市民の思い出の象徴であり、心のよりどころであることを、私たちは今一度深く胸に刻みたいと思います。

懇談会委員の方々が慎重に協議され、報告頂きました統廃合等に関する提言を真摯に受けとめ、保護者・市民と協議を重ね、子ども達の教育環境の一層の充実に向け努力してまいります。

込み。

H26
18
541
8
227
7
210
7
205
6
132
6
107
6
136
6
53
6
55
4
41
6
73
4
28
84
1808
15
553
7
245
3
62
6
186
3
57
34
1103
118
2911